

今、改めて感じるお米のありがたさ
 茨大附属中学校 一年 園部 亜唯彩
 ー我が家の食卓は、まるで相撲部屋のよう
 だね。
 夏休みのある昼食時、私たち姉弟の食べっ
 ぶりを見て、母は笑った。確かに、私の最近
 の食欲は半端ではない。食べても食べてもお
 腹が空く。いつも大盛りにも白米をよそつても
 何度たっておかわりしたくなる。私はそれく
 らい、お米が大好きだ。

昨年春、コロナ禍で学校が休校になった。
 その時、姉弟三人で相談し、給食がないかわ
 りに、家で昼食当番をつくらう、という話に
 なった。三人で献立を考え、日替わりで昼食
 を作る当番を決めた。それ以来、この当番は
 すっくと続いていて、今年の夏休みも継続して
 いる。ただ一つかわったのは、初めの頃は麵
 類やパン料理もあったのが、それではお腹が
 満たされなくなり、最近では、井が私の定番
 料理になったことだ。

色鮮やかな三色丼。北海道旅行で食べた、感動したあの味を再現した豚丼。バター特西、油の味がたっぷり染み込んだ、名付けて「ガナス丼」。とろとろチーズかたっぷりとかかたっポテト丼。日ごとに具材を替え、白米との相性ぴったり味の楽しむ。その腕前は、家どんどんと上かっている気はしていたが、家族に「今回も世界一美味しい丼だね。」と言われると、それが確信に変わり、自信となる。思わず、口にご飯を頬張りながら、笑みがかこぼれる。そうして、楽しい昼食の時間を過ごしながら脳裏に浮ぶのは、新緑が芽吹く頃に行く田植えの光景だ。

年に一度、祖父の田んぼに、親戚が一同に会して行われる田植えは、五月の一大行事だ。祖父や父は、田植え機に乗り込み、悠々と苗を植えていく。私と妹は、苗かごを腰にし、よい、田植え用の長靴を履いて、田植え機か

茨城大学教育学部附属中学校

届かない所に、一本一本丁寧に苗を植える。
 おじたちや母は、苗かごを洗ったり、田んぼ
 の中をならしたりと、忙しそうだった。そんな中、
 弟は、田んぼのかえるに大喜び。田んぼの泥
 にはまりながら、三十四匹以上のかえるを捕ま
 えた事もある。泥だらけになって飛び跳ねて
 いる様子はまるで、田んぼの中のかえるとそ
 っくりで笑ってしまふ。
 ようやく一つ目の田んぼが緑色に染まる頃
 おばといとこか、祖母特製のお弁当を持って
 やつてくるのも、楽しみの一つだ。たけのこ
 やふきの煮物、具沢山のおこわは、あせ道で
 田植えを終えた田んぼを見渡しながら食べる
 と、格別の味だ。これで、午後の田植えもも
 うひと踏ん張りだ、と力が湧いてくる。
 全ての田植えを終えた時、いつも私は、こ
 の上ない達成感を得ることができる。それは、
 親戚みんなで一生懸命植えた苗が、気持ち良
 さそうに太陽に照らされ、これからすくすく
 と育っていく様子が目に浮かぶからだ。今、

一面を見渡すと、青々とした苗も、秋には黄
 金色に変わる。稲刈りを経て、新米となるの
 が待ち遠しい。田植えを通して私は、お米の
 ありがたさや大切さをししじみと感じるの
 だ。

しかし、昨年から続くコロナ禍により、田
 植えの様子も様変わりした。マスクを着けて
 会話は最小限に、参加が叶わない親戚もあり、
 食事も離れ、密を避けての田植えとなった。
 少し寂しい気もせじたけれど、みんなで一生懸

命植えたお米に変わりはない。その証拠に、
 私は料理をするようになって、お米のありが
 たさに改めて気が付くことができたからだ。
 だから今日も私は、家族の笑顔のために、
 思いのつまったお米を炊いて、美味しい丼を
 作ろうと思う。

